

日本人学習者が多用する主体的考えを表す英語表現の考察

—「私は最善を尽くしたいと思う」
は I think I want to do my best. ではなぜおかしいか—

太田 一郎（子ども心理学科）

A Study of English Expressions Based on Original, Individual Ideas and Thoughts among Japanese Foreign Language Learners

Ichiro Ota

Department of Child Psychology, Kamakura Women's University

Abstract

In modern English education, developing communicative skills among students is very important. This study will clarify the differences in English and Japanese expressions based on original, individual ideas and thoughts. I will also explore an effective English teaching method that will provide the students with good skills in communication and correct their use of awkward English expressions.

Key words: original, individual ideas and thoughts, English expressions, skills

キーワード：主体的な考えや思想、英語表現、技能

1. はじめに

現代の日本の英語教育においては、自らの考えを主体的に述べるアウトプット力（発信力）養成が重視されている。2020年の東京五輪招致、さらには、2050年度以降に現在の若者たちが社会の中核となって活躍する時代に向けて、文部科学省主催有識者会議の中の「英語教育の在り方」に関する意見交換でもその期待度は高い。その観点で、学生たちが用いる主体的な考えを伝える英語表現を見てみると、それは意外にも限定的で、「私は～と思う」と表現することが一般的である。英語では I think～ という表現を多用してしまう。しかし、日本語の「思う」という言葉に含まれる意

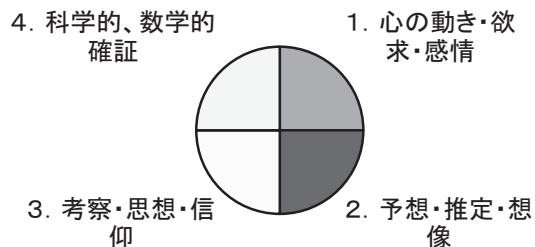
味の中には、多種多様な場面とそれらに合致した意味合いがあり、英語の think という言葉がすべてそれらをカバーすることはできない。本稿では、その言語的表現の差異を明らかにしつつ、学生たちが主体的に英語で意見を述べることができるような効果的な英語コミュニケーション指導を考察する。

2. 主体的考えを表す日本語表現の「思う」が示す言語的 4 領域

私たちが用いる日本語の「思う」という表現の中で、主体的な考えを表す表現にはどのようなものが考えられるのか。例文を用いてそれらの意味

内容を4つの領域に分けて論じてみたい。(【図1】
【表1】)

【図1】 主体的な考えを表す日本語表現の「思う」
が示す言語的4領域のイメージ図



【表1】 主体的な考えを示す日本語表現の「～と
思う」の領域別比較表

言語的4領域	客観的根拠・ 知識・経験	相手に対する 同意
1. 心の動き・欲 求・感情	示さない	求めない
2. 予想・推定・ 想像	ほとんど示さない	さほど求めない
3. 考察・思想・ 信仰	総合的に示す	求める
4. 科学的・数学 的・確証	数値・データ等 で示す	強く求める

① あなたが来てくれてうれしく思う。

I'm glad you will come.

② 彼は遅刻してくると思う。

I suppose he will be late.

③ 人間はみな平等だと思う。

I think we human beings are all equal.

④ 鑑定士はこの絵はピカソが描いた作品だと思っ
た。

A connoisseur presumed that Picasso drew this
picture.

- ①で示される「思う」は心の動き、欲求、感情を示すものである。「～したい」「～になればいいな」「～のような気持ち・感じがする」のような意味を表す。これらの意味を英文で表す場合は、thinkのような「思う、考える」を使うことはあまりなく、まれである。日本語では「思う」と表現していても、その内容は、具体的な事例や経験に基づく考えや意見

を示しているのではなく、内面から湧き上がっ
てくる心の動きを表現しているからである。
この領域には、「欲求」「期待」「願望」「感情」
が含まれる。

- ②で示される「思う」は、客観的で正当な根拠は持たないが、「～と推察する」「～となんとなんと思う」という意味を表す。この領域には「予想・予感」「推定」「想像」が含まれる。たとえば、「彼は遅刻してくると思う。」という日本語を英文で表現する場合、「彼が時間になっても来ないのは、なぜかはっきりとは分からないが、何となくやむを得ない理由が生じて遅刻してくるからではないか。」というニュアンスを含んだ表現がこの領域である。根拠に乏しい予想や予感、推定または想像、驚きなどを伴う想定外の出来事などを表現しているのである。

- ③で示される「思う」は、一般的に、自分が育った環境や経験、学習等による知識や客観的な事例や根拠をもとにした考えや意見を述べる表現で、「～だと考える」「～だと思う」のような意味を表す。この領域には「考察」「思想」「信仰」が含まれる。学習や経験をもとにした主体的な考えや意見を述べる表現として最も適している。例えば、「彼は時間にルーズなところがあるし、実際に待たされた経験もあるから遅刻してくるのではないか」となると、I think he will be late.と表現するのが妥当であり、その根拠が乏しい場合はI suppose he will be late.とするのが自然である。また、この領域の表現の背後には、聞き手に対して同意や賛同を得たいという意思があり、説得力を持たせ相手の理解を求めたいという姿勢が見られる。

- ④で示される「思う」は、科学的・数学的データに基づく確証を述べる表現で、「(確実に)～だと思う」「～だと実証していると思う」のような意味を表す。3. で示した表現をさ

らに一步進め、力強くその正当性を主張するものである。この表現は、会議や様々な科学的・数学的分析を通して結論を導くことを目的とした議論・討論・シンポジウムなどで多用される。たとえば、4. の例文の presume は、ピカソの作風だと何となく思う、ピカソの絵を美術で学習したからそう思う、というニュアンスではなく、「ピカソが描いたならば、その独特の構図・筆使い・色彩があり、どれもがそれらに合致しているから彼の作品だと思う」という意味になる。

3. 主体的考えを表す日本語表現の「思う」が示す言語的4領域で用いる英語表現

ここで、2. の主体的考えを表現する日本語の「思う」が表す言語的4領域では、それぞれどのような英語表現を使って述べているかを、具体的な例文を用いて検証する。

3-1. 心の動き・欲求・感情：want, expect, hope, feel or be-verb + emotional adjectives, be afraid, suspect, doubt, wonder, not care (not mind)

- ・(将来ニューヨークを訪れたいと思う) I want to visit New York in the future.
- ・(彼は試験に合格すると思う) I expect he will pass the examination.
- ・(明日天気になればいいと思う) I hope it will be fine tomorrow.
- ・(この写真を見てうれしく思う) I feel glad (I'm glad) to see this picture.
- ・(彼は病気ではないかと思う) I'm afraid he is sick.
- ・(彼女は嘘をついていると思う) I suspect she is telling a lie.→積極的の疑念
- ・(彼はいつも温和ではないように思う) I doubt if he is always gentle.→否定的の疑念
- ・(何が起きているのかしらと思った) I wondered what was going on.
- ・(彼が言うことは何とも思わない) I don't care what he says.

これらの例文を見ると、内面から湧き上がる心の動きの中には、心配事、疑念や疑問、不思議さというものも含まれ、それらは客観的な一定の根拠、知識、経験など基盤としたものではなく、自然と心に芽生えてくるものなので think を用いることはあまりなく、まれであることがわかる。

3-2. 予想・推定・想像：suppose, guess, imagine, think の疑問・否定表現の一部

- ・(若い人は炭酸飲料が好きだと思う) I suppose young people like soda.
- ・(あなたはたぶん正しいと思う) I guess you are right.
- ・(富士山からの景色はとても美しいと思う) I imagine the view from Mt. Fuji is very beautiful.
- ・(こんな所で君に会うなんて思いもしなかったよ) I never thought that I'd find you in such a place like this.

これらの例文から、「具体的な根拠はないが何となくそう思う」、「思いもよらない想定外の出来事」、「実際には知りえないが、たぶん〜であろうという想像」などの意味を表現するときに適していることが理解できる。

3-3. 考察・思想・信仰：think, consider, conceive, believe

- ・(子どもたちが悪い行いをしたとき罰するのは間違いだと思う) I think it's wrong to punish children when they show the bad behavior.
- ・(山中先生は立派な学者だと思う) I consider that Mr. Yamanaka is a brilliant scholar.
- ・(人は外国人に対して偏見を持つ傾向があると思う) I conceive that people tend to have a prejudice against foreigners.
- ・(宇宙には人間に似た異なる生命体がいると思う) I believe there are different creatures like human beings in the space.

これらの例文から、この領域は、学習による知識や経験、具体的根拠を伴って主体的に自己の考えや意見を述べるときに用いる表現であることが理解できる。一般的に、主題や問題において個人の意見や考えを述べるときに多用される。

3-4. 科学的・数学的確証: be assured (sure), presume, conclude (come to the conclusion), judge

- ・(多くの証拠から彼は無罪であると思う) I'm assured (sure) he is innocent through many evidences.
- ・(集団的自衛権の法案を認めるのは危険だと思う) I presume that it's dangerous to admit the bill of collective self-defense.
- ・(彼女のプレゼンテーションを聴いて、彼女の計画は受け入れられると思う) I conclude (come to the conclusion) that her project is acceptable from her presentation.
- ・(ドーピングテストの結果から見て、彼らは薬物使用をしていなかったと思う) I judge that they didn't use drug through the result of doping testing.

これらの英文から、多くの事例や科学的・数学的証拠、データをもとに、事実であるとみなす根拠があり、強い確信を持っている場合に用いる表現であることが理解できる。また、十分な確証が得られていないときは、3. で示す考察・思想・信仰の表現にとどめることも可能であることを付記したい。

4. 日本語と英語の間に見られる主体的な意見を述べる際の言語的表現の差異

主体的な意見を述べるための英語表現は、4つの領域のうち、どの領域が重視されるだろうか。自分の気持ちやメッセージを相手に伝えるという観点から考えると、4領域全ての表現が均等に必要である。さらに英語を共通言語としたコミュニケーションの場面を考えると、「道順を尋ねる」「レストラン等で注文する」「買い物をする」など、情報のやり取りによってある目的を果たした後に

は相手とのコミュニケーションは終了し、その後の継続性を持たないもの (temporary communication) と、家族や友人やビジネス等で交わされ、互いのアイデンティティを示しつつ信頼をベースとした継続性のあるコミュニケーション (continuous communication) の2つがある。後者の場面における英語コミュニケーションの中のアウトプット (発信力) は、相手に自分自身のアイデンティティを示し自分の考えに理解を求めて説得するという点で、自己の考えや意見を好意的に受け止めてもらい建設的な相互関係をつくることが大切である。その意味では、3-3. 考察・思想・信仰と、3-4. 科学的・数学的確証に用いる英語表現を定着させることが重要であろう。また、これまでに示した英語の例文の主語は全て 'I' で統一しているが、メッセージの正当性や整合性を主張する手段として「聞き手を含めた共通目標であり共同作業である」ということを表すために We を主語にすることが有効であることもつけ加えたい。日本語では主語そのものが省略されて表現されることが多いので、この点は注意喚起が必要であろう。アメリカ合衆国オバマ大統領の就任演説 (日本経済新聞2013) と日本国安倍内閣総理大臣の外国人記者向け所信表明演説英語版 ("Japan is back", policy speech by Prime minister Shinzo Abe at the Center for Strategic and International Studies 外務省2013) を比較して主体的考えや意見を述べる英語表現の差異を見ると、オバマ氏は、The United States of America を主語に用いることなく首尾一貫して主語に We を多用し、think や consider のような表現ではなく、affirm のような信念に基づく断定的で力強い表現を多く用いているのに対し、安倍氏は、主語を I, We, Japan の3つに使い分け、助動詞 must を動詞につけることで決意の強さを表している。(【表2】【表3】) これら2人の演説から、主体的な考えを伝える表現には、3-3. の検証の中の I think や I consider などのフレーズは必ずしも必要ではなく、多用されないケースもあることがわかる。人々に力強く主体的なメッセージを届けるための表現は、日本語を母語とする者の英語表現

【表 2】 それぞれの演説における主語、述語動詞の比較

	使用されている主語	使用されている述語動詞
アメリカ合衆国オバマ氏就任演説 (2013/1/22 日本経済新聞)	We (41) Our journey (5) I (2)	affirm, recall, continue, hold, determine, discover, resolve, understand (3), <u>believe</u> (5), claim, recognize, show, renew, know, declare, define, swear
日本国安倍氏外国人記者向け所信表明演説 (2013/2/22 Ministry of Foreign Affairs of Japan 英語電子版)	I (22) We (2) Japan (6)	reiterate, reflect, <u>consider</u> (2), <u>think</u> (3), mean, continue, lead, resolve, bring back (5), urge, shoot, view, intend, start, work, pursue

* 下線部は「～と思う」という日本語に相当する英語表現

* () 内は使用された回数 無数字は 1 回使用

【表 3】 それぞれの演説における英語表現の特徴

	使用されている英語表現の特徴
アメリカ合衆国オバマ氏就任演説 (2013/1/22 日本経済新聞 英語電子版)	<ul style="list-style-type: none"> • We, the people, still believe that～を連続して使用する • Our journey is～を連続使用、聞き手と目標の共有を図る • 断定的で力強い述語動詞を多用し直接的な表現を使う • will, must, can を使い分け意志の強さを明確にする
日本国安倍氏外国人記者向け所信表明演説 (2013/2/22 外務省 英語電子版)	<ul style="list-style-type: none"> • I を主語にして表現し、must で意志の強さを表す • Japan must stay strong など国の姿勢を数回強調する • My task is ～, In my plan～などを多用する • think, consider などの表現を数回用いる

と英語そのものを母語とする者の英語表現では使用される主語や述語動詞において多くの違いが見られ、学生が頻繁に用いる「～と思う」という日本語表現には左右されず、英語表現独特の主語と述語動詞で表されることも少なくないことがわかる。

5. 考察

前述の 2. および 3. の主体的考えを表す日本語の「思う」が示す言語的 4 領域とそれらに合致する英語表現から、日本語では「思う」という 1 語で多種多様な場面と内容を表すが、英語表現においては、それぞれに対して異なる動詞や表現方法を用いるという言語的表現の差異が見てとれる。第二言語習得において、Krashen (1985) の先行研究では、「読む、聞く」を重視したインプットトレーニングが言語習得において有利とする立場だが、現在、日本が求められている英語教育の成果は語彙や意味の習得による内容理解力ではなく、その習得した英語表現を他者に向けてどう使うかという実践的な言語運用力である。「アウトプット仮説」(Swain 1995) では、アウトプットはインプットに比べて学習者により多くの知的努力を

要求し、深い言語処理をさせる。「読む、聞く」の理解行動ではその理解度の不十分さが見えないように進行させることが可能だが、「話す、書く」の生産的言語活動では自らの中間言語を使ってその限界を認識することができる。「伝えたいこと」と自らの言語能力で「伝えられること」のギャップを知り、相手に自分のメッセージをわかってもらおうと説得力を持たせようとする努力がさらなる言語能力向上を導くと結論づけている。(横山 2004) しかし、ここで見落としてはならないのは、日本語を母語とする学習者は、主体的な考えや意見を構築し表現するにあたって、日本語が持つ特徴的な表現を使って表したものを英語表現に組み替えるという作業があるという点である。そこには言語的表現の差異があり、その差異を認識したうえでそれを補う有効な表現方法を使おうとする姿勢を学生が学ばなくてはいけない。4. で示したように、日本語では、主体的な考えや意見であっても婉曲的で間接的な表現が好まれ、「～と思われる」「～と言われている」等の表現を多用し、その主語においても所在を明らかにしない傾向にある。また、主語を明らかにするときでも、「聞き手はそう考えないかもしれない」という立場を

尊重し、「私」を主語にして個人的な見解として控えめに伝える傾向もある。それに対して英語では、断定的で直接的な表現が好まれ、「～と確信する」「～と断言する」「～と誓う」等の表現が多くみられ、不特定多数の人々に対して賛同を求める際には、日本語の「～と思う」に該当する **I think** などは使用頻度が少ないこともある。主語においても話者の主体的な考えに説得力を持たせるために、聞き手を含めた **We** を主語にすることもしばしばである。

それらの観点から、主体的な考えやメッセージを伝える英語表現の言語的特徴を、様々な場面に応じた具体的な例文の中で示し、学生が自分の考えを英語で表現するにあたって、日本語で表現したものを単に英語に置き換えて表現するのではなく、英語を母語・国際語とする聞き手にとって

- ① わかりやすく (**understandable**)
- ② 一貫性があり (**consistent**)
- ③ 包括的で (**comprehensive**)
- ④ 説得力のある (**persuasive**)

英語表現を選びながら伝えていく姿勢を浸透させていくことが、英語コミュニケーション指導において重要な側面であると考ええる。「私は最善を尽くしたいと思う」は、**I think I want to do my best.** という表現では文法構造を満たしているとしてもおかしい表現であり、**I'll do my best.** が自然であると学生たちは気がつくだろう。

参考文献

- Helen Spencer-Oatey and Contributors *Culturally Speaking: Managing Rapport through Talk across Cultures* (The Continuum Publishing Company) (2000)
- Krashen, S. *The Input Hypothesis: Issues and Implications*. Torrance, CA: Laredo Publishing Company, Inc. (1985)
- Swain, M. Three functions of output in second language learning. In G. Cook & Seidlhofer, B. (Eds.), *Principle and Practice in Applied Linguistics* Cambridge: Cambridge University Press (1995)
- 横山紀子 「言語習得におけるインプットとアウトプットの果たす役割」 日本語国際センター紀要第14号 (2004)
- 文部科学省 英語教育の在り方に関する有識者会議資料 (2013)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/shiryo/attach/1349048.htm
- 日本経済新聞 オバマ大統領就任演説英文電子版 (2013)
- “Japan is back”, policy speech by Prime minister Shinzo Abe at the Center for Strategic and International Studies (外務省) (2013)
- ケンブリッジ英英辞典 (小学館) (2004)
- 伊藤治己 アウトプット重視の英語授業 (教育出版) (2008)
- *Oxford English Dictionary* (Oxford University Press) (2012)
- ジーニアス新英和・和英中辞典 (大修館書店) (2014)
- 新英和・和英・英英中辞典 / 英語表現辞典 (研究社) (2014)

要旨

本研究は、日本の英語教育の成果が問われる中、アウトプット力（発信力）養成を重視した英語教育の効果を目指すにあたり、主体的な考えや意見を述べるための表現を日本語と英語の双方で比較し、その言語的表現の差異を探りながら学生たちが陥りやすい英語表現の不自然さを矯正し、自信を持って他者にメッセージを伝えようとする姿勢を培うことができる英語コミュニケーション指導を考察した。

(2015年9月24日受稿)